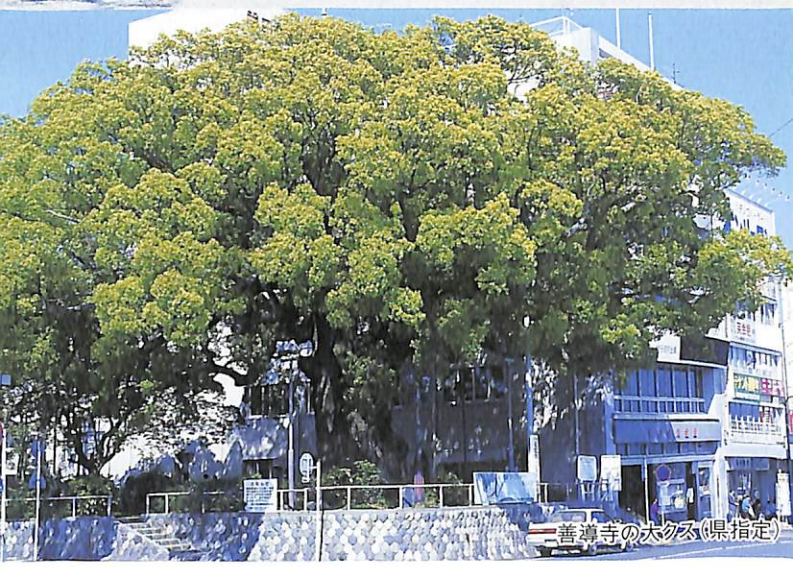
いわた

ふるさと散歩

中泉編

磐田文化財マップ

府八幡宮楼門（県指定）



善導寺の大クス（県指定）

国府・中泉御殿、そして磐田の玄関口へ

── 中泉地区の文化財 ──

磐田原台地の南縁部に位置する中泉地区は、東海道線の開通により、磐田の玄関口として発展してきました。江戸時代の中泉村、久保村、二之宮村、梅原村からなります。南には古代に大之浦と呼ばれた入江の名残りである大池が、東にはその一部であった今之浦があります。

中泉地区は、古代から遠江の中心として繁栄し、多くの文化財や遺跡が残されています。奈良時代には古代遠江の中心である遠江国府や、官営寺院である遠江国分寺が置かれました。また、府八幡宮は国分寺の鎮守として天平年間に建立されたと伝えられます。戦国時代の終わり頃、徳川家康の勢力が及ぶと、家康が宿泊した館である中泉御殿が造られました。江戸時代には、遠江一帯の幕府の直轄地（天領）を治めた中泉代官もこの地に陣屋を構えました。江戸時代の東海道は見付宿から 中泉を回り、天竜川の渡しに向かいます。中泉の往来には商家が並び、多くの人々が集まりました。

天平の甍（いらか）　―遠江国分寺跡とその周辺―

磐田市内には、古代の寺院や役所の遺跡が分布しています。特に、奈良時代には大之浦に臨む台地上に、遠江国府や遠江国分寺、遠江国分尼寺、大宝院廃寺などが建てられました。国分寺は国府の北方に建立され、その東側には府八幡宮、さらにその東には三之宮とも言われる天御子神社が、国分寺の北方には国分尼寺が造られました。

天平13年（741年）、諸国に国分寺と国分尼寺を建立するよう詔が出され、遠江国分寺の建立が始まりました。国分寺は金堂を中心に七重塔・講堂・中門・回廊などの伽藍が配置されていました。伽藍は築地塀などによって区画されていたようです。

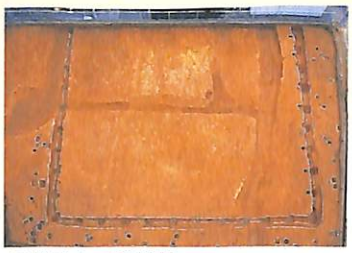
遠江国分寺は昭和26年に発掘調査がされ、七重塔跡をはじめ主要な伽藍が発見されました。昭和27年に国の特別史跡に指定されています。

遠江国分寺跡（国特別史跡）

国分寺跡出土の軒瓦

遠江国分寺の瓦

遠江国分寺や尼寺に使われた瓦は、主に掛川市で焼かれました。また、屋根の修復のために市内の寺谷でも瓦が焼かれました。



国分尼寺の講堂跡

遠江国分尼寺の跡

国分尼寺は国分僧寺と共に、当時の国ごとに造られました。遠江では国分寺と南北に並ぶように建てられていました。発掘調査では版築と呼ばれる、土を固く叩き締めた基壇の跡が発見されています。

大之浦と万葉歌碑

遠江の国司であった桜井王が、天皇に詠進した歌が万葉集にあります。この歌は天皇を慕うもので、「九月のその初雁の使いにも、思う心は聞こえこぬかも」と詠みました。天皇は「大の浦のその長浜に寄する浪、寛けく君を念うこの頃」の返歌を詠んでいます。大之浦は都にも知られた名勝でした。この2首を刻んだ万葉歌碑は、大之浦の一部であった今之浦を見下ろすことができるワークピア磐田駐車場に建立されています。

万葉歌碑

遠江国分寺の伽藍の範囲は東西180m、南北　253mにも及び、その周囲にも関連した施設が点在していたものと考えられます。七重塔の跡には礎石が残っています。国分寺の建立や維持には、莫大な労力と経費を必要としました。

国分寺の七重塔心礎

中世になると国分寺は衰退し廃寺となりますが、国分寺の一隅に堂が建てられました。磐田市では、平成17年度から史跡の再整備事業に取り組んでいます。

その資料を得るための発掘調査で、主な建物の基壇（土台部分）がいずれも「木装基壇（もくそうきだん）」とよばれる、全国的にも珍しい特殊な基壇であることがわかっています。

コンピュータ・グラフィックスで復元した遠江国分寺

祇園祭（ぎおんまつり）と天御子神社（あまみこじんじゃ）

天御子神社は「天王さま」とも呼ばれる古社です。祇園祭は天御子神社の祭礼で、遠江総社である淡海国玉神社への神輿の渡御が行われます。中世以前の祇園祭は見付宿をあげて行われたようです。また、周辺には「三之宮」の小字が残ることから古代遠江の三之宮であるという意見もあります。ヤマモモの木は推定樹齢300年の雄株で、目通り周囲4.4m、樹高15.5mの大きさです。

天御子神社のヤマモモ（市指定）

中泉の国府　―御殿・二之宮遺跡―

磐田駅の南方に広がる御殿・二之宮遺跡は、弥生時代～近世にかけての遺跡です。弥生時代中期から人が住み始め、ムラが営まれました。また、発掘調査で奈良時代の地名や人名を記した木簡や墨書土器が出土しました。さらに、国司の宿泊施設と考えられる大規模な建物跡や、祭祀の場も見つかり、奈良時代の国府が中泉地区にあったことがわかりました。大規模な建物跡は御殿遺跡公園に保存され、その位置がわかるようになっています。

発見された建物跡

御殿遺跡公園

中泉の歴史と文化財

京見塚古墳と戒成皇子伝説

■京見塚古墳

京見塚古墳は、径47mを測る古墳時代中期の円墳で、墳丘からは天竜川が一望できます。この地に住んだ戒成皇子が、塚の上から京を偲んだため、「京見塚」と呼ばれるようになったと言われます。

大正11年に市内最初の学術的な発掘調査がされました。昭和56年の発掘調査では、京見塚古墳周辺に径10m前後の12基の小円墳や、埴輪を焼いた窯、旧石器時代の集落跡などが発見されました。発見された古墳は復原され、公園となっています。付近にある土器塚（かわらけづか）古墳は墳形をよく残しています。

■土器塚古墳（県指定史跡）

県指定　善導寺の大クス

磐田駅前に生えるクスは樹齢推定 700年、目通り周囲 8.2m、樹高28mを測る大樹です。この場所には善導寺があり、この木は墓所の目印として植えられたものだと伝えられています。昭和33年に県の天然記念物に指定されています。

家康と中泉御殿跡

徳川家康は、府八幡宮の神主であった秋鹿(あいか)氏の屋敷跡に館を設けました。これが中泉御殿です。天正12～15年（1584～87年）に整備されました。一万坪の敷地に水濠をめぐらせたもので、鷹狩りや、東海道往来時の家康の宿泊施設として利用されました。また、西方の反徳川勢力に備えた作戦基地・軍略の場ともなりました。

御殿は江戸幕府の体制が整った寛文10年(1670年)に廃止されました。建物は近隣の諸寺院に払い下げられ、跡地は畑になり、「御殿」の地名として残されています。表門は見付西光寺に、主殿と裏門は中泉西願寺に、書院は竜洋地区常楽寺に移築されました。

中泉御殿の裏門
―西願寺表門―

■中泉御殿裏門（市指定）

西願寺に移された、中泉御殿の裏門は山門として残っています。裏門は1間1戸の薬医門です。切妻の屋根は本瓦葺きで当時の様子を偲ぶことができます。

■中泉陣屋の碑（御殿遺跡公園）

鉄道の開通と中泉

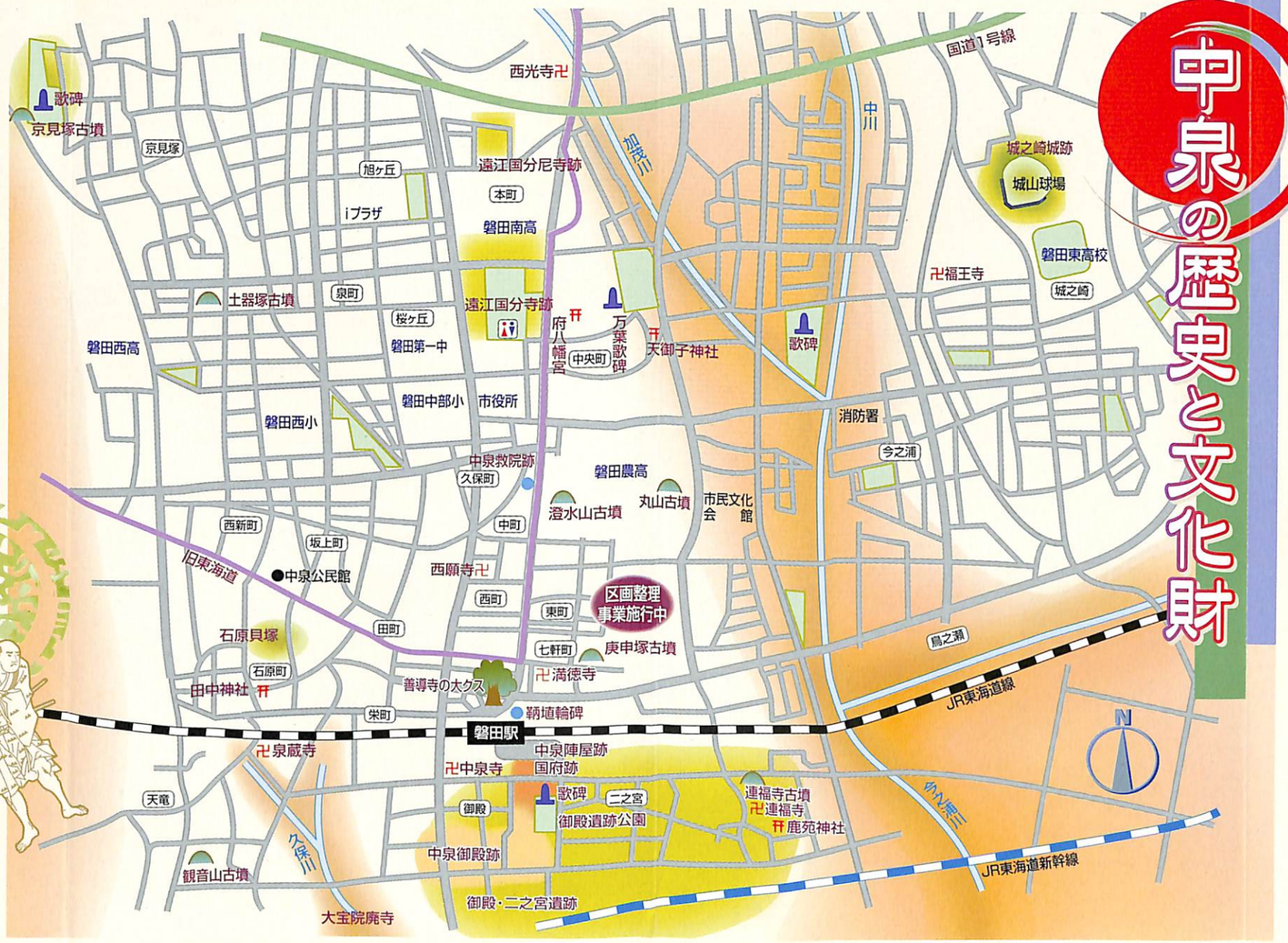
■鞆埴輪の碑

明治20年に中泉地区に鉄道が敷設することが決定し、工事が開始されました。磐田駅は明治22年に東海道線開通に伴い中泉停車場として開設されました。ホームにはかつて架橋の基礎に使われた鉄柱が残っています。鉄柱には「明治四四年、鉄道院、川崎製鉄兵庫分工場鉄道部製造」と書かれています。また駅前には、磐田の古墳文化の象徴として、堂山古墳から出土した鞆（とも）埴輪の碑が建てられています。

農学校の洋館

■磐田農業高校記念館（国登録文化財）

農学校と呼ばれる県立磐田農業高校の校庭に洋風の建物があります。この洋館は明治42年に講堂として建てられた、明治期の中等教育を知る貴重な文化財です。現在は記念館として、農業教育の変遷を知る貴重な資料が保存されています。



中泉代官と陣屋

■中泉陣屋表門（市指定）

江戸幕府は天領（直轄地）支配のため、各地に代官を配置しました。遠江にも数名の代官が任命され、中泉などに陣屋が置かれました。遠江の代官は次第に整理され、中泉代官のみとなります。中泉代官は遠江をはじめ三河などの天領を支配しました。

中泉代官は慶長6年（1601年）に岡田郷右衛門が初代の代官になったのに始まり、伊奈忠次や大草太郎左衛門、羽倉簡堂、林鶴梁など50名余が代官を勤めました。陣屋に使われた表門は新島に移築されています。

林鶴梁（はやしかくりょう）と満徳寺

■林鶴梁の母の墓

林鶴梁は渡辺崋山に師事し、江川英龍（ひでたつ）とも親交があった儒学者です。嘉永6年（1853年）に中泉代官になりました。安政の大地震などの天災に対処し、窮民を救済するため恵済倉を設け、食料を備蓄しました。鶴梁の義母は中泉で病没し、その墓所が満徳寺にあります。

■泉蔵寺　秋鹿家の墓所

秋鹿（あいか）氏と泉蔵寺

秋鹿氏は室町時代に今川範国に仕え、中泉の地頭職とともに、府八幡宮の神主を勤めていました。その後、徳川家康に仕え、代官となりました。19代の時に代官職を辞したのち府八幡宮神主に専従しました。秋鹿氏の墓所は泉蔵寺にあります。泉蔵寺には府八幡宮本地仏も納められています。

澄水山古墳と丸山古墳

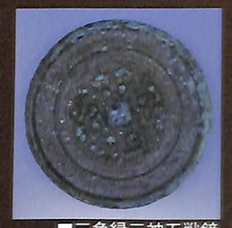
■丸山古墳

県立磐田農業高校敷地内に古墳時代中期（5世紀前半）に築かれた、2基の古墳があります。澄水山古墳は市史跡に指定された帆立貝形の古墳です。全長55mで、墳丘には葺石や埴輪が並べられていました。丸山古墳は径45m、高さ約5mの円墳です。

庚申塚（こうしんづか）古墳

古墳時代前期（4世紀）に造られた前方後円墳です。寺院の建立などにより、墳形は削平されました。三仭坊（みひろぼう）本堂が建つ小高い山が後円部です。大正時代末頃の測量では、全長83m、高さ4mの規模でした。明治時代に発見された鏡、石釧、車輪石が市の文化財に指定されています。

連福寺古墳出土の三角縁三神五獣鏡


■三角縁三神五獣鏡

連福寺本堂北側にあった土墨状の高まりから鏡が発見されました。鏡は三角縁三神五獣鏡と呼ばれるもので、「張氏作」から始まる銘文と3人の神人、5匹の神獣が表現されています。土墨状の高まりは、全長50m以上の前方後円墳の一部であったと考えられます。

鹿苑（ろくおんじゃ）神社と連福寺

■重盛供養塔

鹿苑神社は遠江国の二之宮とも言われる神社で、地名のいわれともなった古社です。鹿苑神社の北側に連福寺があります。創建は不明ですが、保元元年（1156年）に平重盛公の追善供養のため、七堂伽藍を建立し、連福寺に改称したと伝えられます。その後、焼失してしまいました。境内に平重盛公の供養塔があります。

閻魔大王（えんまだいおうざぞう）坐像

■閻魔大王坐像（市指定）

連福寺の閻魔大王坐像は、江戸時代の国分寺に祀られていたものです。像の形や表現の方法から鎌倉時代末から室町時代初期に作られたものと考えられます。現存する閻魔像の中では、県内1、2の大きさで、閻魔堂の篇額は山岡鉄州の書です。

中泉奉行 前嶋密（ひそか）と中泉救院

明治政府が成立すると徳川家は、静岡に移され、静岡藩となりました。中泉代官は廃止され、かわって静岡藩の奉行が置かれました。初代の奉行には前嶋来助が任命され、かつての中泉陣屋で執務をとりました。前嶋はのちの近代郵便制度を創設した前嶋密です。前嶋は中泉奉行所管内に移住した士族の世話や、その師弟の教育にあたりました。また、窮民や障害者の救済のため、救院の設置を呼びかけました。中泉救院は泉蔵寺を仮の救院として開設され、明治7年に東海道に面した地に移りました。中泉の有力者、青山宙平らの努力で明治20年頃まで存続します。

磐田市概略図

1.獅子ケ鼻公園
2.豊岡駅
3.社山城
4.豊岡総合センター
5.米塚古墳
6.銚子塚古墳・小銚子塚古墳
7.長者屋敷遺跡
8.新豊院山古墳群
9.磐田市立総合病院
10.スポーツ交流の里ゆめりあ
11.磐田インターチェンジ
12.豊田パーキングエリア
13.鶴ケ池
14.桶ケ谷沼
15.甑塚古墳
16.熊野の長フジ
17.アミューズ豊田
18.旧赤松家記念館
19.埋蔵文化財センター・中央図書館
20.矢奈比売神社(見付天神社)
21.旧見付学校
22.かぶと塚公園
23.京見塚古墳
24.遠江国分寺跡
25.磐田市役所
26.府八幡宮
27.善導寺大クス
28.城山球場
29.ヤマハスタジアム磐田
30.香りの博物館
31.松林山古墳
32.医王寺
33.堂山古墳跡
34.大池
35.静岡産業大学
36.なぎの木会館
37.はまぼう公園
38.ゴルフ場
39.掛塚港跡
40.竜洋海洋公園

府八幡宮中門(市指定)

国府の鎮守 ―府八幡宮―

神宮寺の築地塀

府八幡宮は、天平年間(729~748年)に遠江国司であった桜井王が、国府の守護として勧請したと伝えられています。境内の建物の多くが、江戸時代に建造されたものです。寛永12年(1635年)に建立された楼門は静岡県の文化財に、中門・本殿・拝殿付幣殿は市の文化財に指定されています。また、明治元年(1868年)に廃止された神宮寺の築地塀も一部残っています。社宝として瑞花鳳鸞八稜鏡や、平安時代の作である僧形八幡像、女神像があります。

発行・編集　磐田市教育委員会文化財課
〒438-0086　静岡県磐田市見付3678-1　TEL0538-32-9699
発行日　平成16年4月1日　平成23年3月改訂